

中村洋子(お茶の水女大)

目的:日常生活の中における思春期の子供の自己形成の過程を取り上げ、人と“へだたり”を体験することに着目し、へだたる状況の中で何が起こるかを探る。それを基に思春期の親子関係において、かかわりの変化を通し“へだたり”の意味を考究する。

方法:思春期の子供達へのインタビュー・質問紙(T高校1・2年生)により親子間における日常の“へただたり”がどのような構造か、類別して究明する。また“娘の旅立ち”の心理劇等(1988~1995年お茶大心理劇研究会、女性と家族をめぐる人間関係を考える会他で施行)で、関係の変化を行動を通してとらえ分析する。結果を分析・考察するにあたっては参加観察法・フィールドワーク、文献法も組み合わせて参考にする。

結果及び考察:人が生きている状況には、動き、うねり、リズムがあり、そこには節目と拍子がある。“へだたり”の状況とは、親子の関係が変わる時の“間”を意味しているととらえられる。そこには1.日常の固定化された関係を、円滑に柔軟に変える助けとなる。2.一つの関係から他の関係に移行する段階的な関係をつくる。3.子が親に取り込まれず自己領域を守る事が出来る。等のはたらきのあることが明らかになった。新しい親と子の関係(均衡しにくい力関係が存在する)をつくる手だてとして“へだたり”は意義あるものと考えられる。